

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02835

研究課題名(和文) 日本宗教史 の宗教史 - 近代日本宗教史の通史にむけて

研究課題名(英文) A History of "History of Japanese Religion"

研究代表者

山口 輝臣 (Yamaguchi, Teruomi)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：20314974

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、研究課題「日本宗教史 の宗教史」に関わる2度のシンポジウム、すなわち「正史の近代」と「戦後史のなかの「国家神道」」を、研究代表者が主催したことが挙げられる。第二に、そのうちの後者について、その成果をもとにした編著を研究代表者が刊行することである(これは2018年中に刊行の予定)。第三に、通史を執筆する準備作業として、研究代表者がいくつかの論稿を発表したことである。

研究成果の概要(英文)：First, I hosted two symposiums on this research topic. Second, I will publish the results of the latter of them as edited works. Thirdly, I will present several articles as preparation work to write a history of Japanese religion.

研究分野：日本近代史

キーワード：日本宗教史 宗教学 国家神道 帰一協会

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、近代日本における国家と宗教との関係を、一次史料に基づいた政策にかかわる政治史的研究と、政策の前提となる言説の次元についての思想史的研究とを統合する形でやってきた。明治期については『明治国家と宗教』(東京大学出版会、1999年)、大正期に関しては『明治神宮の出現』(吉川弘文館、2005年)などであり、『天皇の歴史09 天皇と宗教』(講談社、2011年)では、天皇と宗教との関わりに焦点をあて、19~20世紀の通史的叙述を試みた。

これらの業績を通じて、国家神道の形成・展開・崩壊(ないし残存)という既存の理解に対し、明治維新決定論に陥っている点、対象が神社に局限されている点などを批判し、以下のような像を対置してきた。明治になってキリスト教の再登場とともに宗教という概念が定着していくなか、明治国家は神仏をはじめとする関連する領域を非宗教と宗教とに区分していく。それが20世紀に入り、民主化の進展と政教分離という発想の一般化によって、かえって非宗教とされた神社が国家と結びつき、ついには一部の信仰を抑圧する事態を招く。国家神道とは、20世紀に出現したこうした事態を否定するためにGHQが採用した用語であり、戦後の宗教を出発させるのに必要とされた表象であった。さらに近年ではこうした歴史像の肉付けを目指して仏教についての調査を本格化させ、『島地黙雷』(山川出版社、2013年)を刊行し、数編の論文を執筆した。

以上のような研究の結果、神道・仏教・キリスト教・新宗教という近代日本に存在した主要な宗教について、史料に基づいた歴史像を持つに至った。そこで、それらをもとに近代日本宗教史の通史を執筆することを構想し、関連する史料・文献の収集を行う一方、過去に書かれた日本宗教史の通史を検討する作業に着手した。その結果、日本宗教史の通史は数が少なく、出版された時期は限定され、刊行形態には時期によって変化があることなどが分かった。

そこから、日本宗教史の通史のあり方自体が、近代日本における宗教への関心のあり方を映す鏡なのではないかとの仮説を着想し、その検証をすべく調査をはじめた。ところが、そもそも著者についてのデータからして乏しく、日本宗教史の通史という存在が、研究の上で盲点となっていることを知った。だが通史レベルの日本宗教史像は、たとえば、専門家以外の日本人がどのような歴史像を描いていたのかを考える上で、格好の素材となるのではあるまいか。とするならば、それ自体が日本宗教史の対象となり得るのではないか。

本研究開始当初の背景は以上のようなものであった。

2. 研究の目的

近代日本宗教史の通史を執筆するという全体構想のもと、本研究では、過去に記された日本宗教史の通史類について、それらはどうのような人物によってどのような意図のもと、どのような研究成果に依拠して記されたのかを微細に検討し、それを介して、日本宗教史の研究そのものを、当該期の宗教への関わり方を示すものと捉え、その推移に着目しながら分析を加える。いうなれば日本宗教史研究を日本宗教史のなかに位置づけようという試みであり、それによって、今後あるべき近代日本宗教史に確固たる礎石を据え、それを十分に踏まえた通史を執筆することを目指す。

3. 研究の方法

研究の方法は、上記の目的によって異なってくる。

目的の と に関しては、過去に記された日本宗教史の通史類の概要を把握した上で、そのいくつかについて本格的な検討に着手し、さらにその位相を考えるという方法を採用する。具体的には、重要と考えられる著作について、その著者・執筆意図・参考文献などを分析する。

一方、目的 については、上記の作業を踏まえながら、どのような通史の形があり得るのかについて、歴史叙述のあり方などにまで遡りつつ、考察を加えていく。またその過程で必要になってくる個別の論点について、史料に基づいた研究を遂行し、その成果を発表していく。

4. 研究成果

大きく3点に分けて説明しておこう。

第一に、2度にわたってシンポジウムを企画し、主催したことである。これらは、いずれも本研究を遂行する過程で、どうしても探求を要する論点について、隣接分野を含む第一線で活躍する研究者を集めたシンポジウムとそのための準備研究会を実施することを通じて、知識を深め、アイデアを練ろうという意図に基づくものである。

具体的には、研究初年度にあたる2015年度に、よりひろく通史の前提となる歴史叙述の問題について検討を進めるべく、当時所属していた九州史学会の支援も得て、「正史の近代 修史事業と歴史学」という題のシンポジウムを開催した。研究代表者による趣旨説明(5. 主な発表論文等の〔学会発表〕にあたる)に続き、渡辺健哉「博士論文になった「正史」 柯劭忞『新元史』をめぐる」、永島広紀「李王職の高宗・純宗実録編纂と小田省吾の『朝鮮史学』」、小笠原弘幸「公定歴史学と教科書 トルコ共和国における「正史」と歴史教育」の3本の報告と、

岡崎敦と有馬学によるコメントと討論という構成である。対象とする地域や時代を異にする歴史家を集めつつ、「正史」を切り口に近代における歴史叙述の型について考える比較史的なシンポジウムであり、闊達な議論を展開することができた。

また最終年度にあたる 2017 年度には、史学会大会の場を借りて、「戦後史のなかの「国家神道」」というシンポジウムを実行した。こちらにも研究代表者による趣旨説明（〔学会発表〕）のあと、藤田大誠「「国家神道」概念の近現代史」、昆野伸幸「村上重良「国家神道」論再考」、須賀博志「戦後憲法学における「国家神道」論」、谷川穰「「国家神道」論の現状をどう見るか」という4本の報告と、苅部直によるコメントに討論という構成であった。ここでは日本近代史・思想史・神道史・憲法学などあえて分野横断的な専門家を集め、「日本宗教史」を考える上で避けることのできないテーマと思われる「国家神道」について、活発な意見交換を行った。幸いにも多くの聴衆を得ることができ、好評を博したようである。

第二に、第一で述べたふたつのシンポジウムのうち、後者について、その成果をもとにした研究代表者を編者とする著書を刊行することである。当日の報告をもとにした論文4本に加え、コメンテーターと研究代表者による2本の論文、さらにはシンポジウムに参加していただいた方々による短い文章を10編ほど加える、附録として関連年表や著作目録をつけることで、戦後史のなかで「国家神道」を考える意味について、多面的に考察することができる本である。現在編集集中で、2018年中末までには刊行される予定である。この成果は研究開始時にはまったく計画しておらず、ややセレンディピティの感もあるものである。

第三に、通史を執筆する準備作業として、いくつかの論稿を発表したことである。これらは研究の目的の に関わるものである。そのなかでも、第二で述べた編著のほか、とりわけ帰一協会についての考察（〔図書〕）は、研究上すこぶる有益であった。上記論文では、紙数の制約などもあって帰一協会の動向に焦点を絞ったが、その前提として、そうした組織が成立するに至る経過を検討していくなかで、諸宗教の交流という水脈をあらためて捉え直し、それを宗教学や同時代の知的潮流のなかで理解する資格を獲得することに成功した。通史叙述にあたり危惧していた個別宗教への分解という事態を免れるための方向性を見出したことになる。これについては、本研究課題の研究期間外とはなるが、この5月に *Buddhists' Visions of the Future in Meiji Japan (1868-1912): From Confrontation to Coexistence, and its Consequences* という題で研究会報告を行った。今後はこれらを受け、「日本宗教史」に本格的に着手していくことになる。

以上のような大きな成果があった一方で、当初計画していた過去に記された「日本宗教史」についての考察は、単行論文とするに至るものを生み出せなかった。史料的な制約が大きい、個々にはさまざまなことが明らかになった。これらは「日本宗教史」のなかにも盛り込んでいく予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2件)

山口輝臣、「新刊紹介 松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』」, 2018年2月、『日本歴史』, 835、111~3頁、査読無

山口輝臣、「書評と紹介 藤田大誠・青井哲人・畔上直樹・今泉宜子編『明治神宮以前・以後：近代神社をめぐる環境形成の構造転換』」, 2015年12月、『宗教研究』, 89-3、572~7頁、査読無

〔学会発表〕(計 4件)

山口輝臣、「シンポジウムはなにを考えようとしているのか 戦後史のなかの「国家神道」：趣旨説明」, 2017年11月13日、史学会第115回大会、東京大学

山口輝臣、「実業家と宗教 - 渋沢栄一を中心として」, 2017年5月14日、東アジア文化交渉学会第9回大会、北京外国語大学（中華人民共和国）

山口輝臣、「宗教学と帰一協会」, 2016年5月7日、東アジア文化交渉学会第8回大会、関西大学

山口輝臣、「正史の近代 修史事業と歴史学：趣旨説明」, 2015年12月12日、九州史学会2015年度大会、九州大学

〔図書〕(計 4件)

小林和幸（編）山口輝臣ほか『明治史講義【テーマ篇】』, 2018年3月、ちくま新書、366頁

・担当部分：「明治国家と神社・宗教」, 95~108頁

見城悌治（編）山口輝臣ほか『帰一協会の挑戦と渋沢栄一』, 2018年1月、ミネルヴァ書房、256頁

・担当部分：「帰一というグローバル化と「信仰問題」 姉崎正治を中心に」, 206~228頁

吉田裕・瀬畑源・河西秀哉（編）山口輝臣ほか『平成の天皇制とは何か 制度と個人のはざままで』, 2017年7月、岩波書店、265頁

・担当部分：「宮中祭祀と平成流」, 135~158

頁

葉室麟、山口輝臣ほか、『日本人の肖像』、
2016年8月、講談社、219頁、
・担当部分：「国家と宗教」、159～174頁

〔産業財産権〕

出願状況（計 0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 輝臣 (Yamaguchi, Teruomi)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：20314974

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()